

『お前の瞳に恋してる』

著：高月まつり

ill：こうじま奈月

「食べながらでいいんだが」

「ん？」

「うちのハウスルールを説明したいんだが」

連は返事の代わりに首を上下に振る。

「食事は、原則として俺が作るが、腹が減ったら勝手に冷蔵庫を開けて、適当に食べていい。それと、食事がいらなときは前もって知らせること。皿洗いは、割られたら困るから俺がやるが、風呂掃除とトイレの掃除は交代制。洗濯も交代制だ」

「ハウスキーパーを呼べ。俺が金を出す」

「もったいない。俺たちでできるだろ？」

「掃除なんてしたことない」

「だったらいい機会だ。俺が教えてやるから覚えろ。大学を二年で卒業するほどの頭だ。すぐに覚えられる」

すると連は真顔で尚志を見つめ「それとこれとは話が別」と言い返す。

「まさか、俺に全てをやらせるわけじゃないだろうな？」

「俺は美香さんから、尚志が全部やってくれると聞かされてきた。……尚志は俺の下着を洗うのがそんなにいやか？ いやなのか？ 俺はお前の下着なら喜んで洗うぞ！」

「洗うのは洗濯機だ。洗濯物を干せ」

「それは無理な相談だ」

ああ言えばこう言う。なんなんだこの我(わ)が儘(まま)な下宿人は。

尚志は眉間に皺を寄せ、麦茶で喉を潤(うるお)した。

「……二人で使う水回りは、絶対に交代で掃除をする。でなかったら使用禁止だ」

風呂はともかくトイレの使用禁止は困るだろう。

案の定、連は低く唸(うな)って悩んでいる。

「掃除を知らないなら、俺が教える」

「尚志が教えてくれるというなら……努力しよう」

「よし。それと……門限はないが、出かけるときは言うかメモにしておくこと。いつまでも帰ってこない心配する」

「俺を心配してくれるのか？」

「料理を作ってるのは俺だからな」

「俺のために料理を作って待ってってくれるんだな……ちゃんと帰るコールする！」

違うと言うのが面倒臭くなって、尚志は適当に頷く。

「他には？ 俺が努力して歩み寄る行動はあるか？」

連が二杯目の皿を空にして、尋ねてきた。

「いや別に。……あ！ 自分の部屋の掃除は自分でやってくれ。それと……マリモに餌をねだられても勝手にやらないこと。朝と晩って決めてるんだ」

尚志は、猫タワーで鏡(かがみ)餅(もち)のようになっているマリモを一(いち)瞥(べつ)して言った。

「了解」

「では、今度は俺が話してもいいか？」

連は微笑を浮かべて尚志を見つめる。

言うことはメチャクチャなのに、どうしてこの男の微笑は魅力的なんだ。悔しい。

尚志はずっと視線を横にずらして「どうぞ」と言った。

「恋人はいないな？」

「失礼な言い方だな」

「俺は確認したいだけだ。ちなみに、今の俺はフリーだ」

「いないよ。今は、な」

意地を張っているわけではない。

去年まではいたのだ。正確には、就活を終えるまでは。

彼女は、彼女が望んだ会社に尚志がエントリーしなかったのを怒って、勝手に去って行ってしまった。

友人たちは「正体が分かってよかったじゃないか」と言ってくれたが、正直かなり落ち込んだ。彼女の去り際の「あなたの親の会社が大きければ、それはそれで納得したんだけどね」の台詞(せりふ)も結構ショックだった。

この野郎。嫌なことを思い出させやがって。

尚志は連の顔を見ていてだんだん腹が立ってきた。

なのにこの男は、いきなり尚志の右手を両手で包み込んだのだ。

「ならば問題はない。イエスと答えてくれ」

「何にイエスと答えるんだ？」

「俺の……人生のパートナーになってほしい。絶対に幸せにする」

「会ったばかりで何言ってんだ？」

「恋愛に時間は関係ない。恋とは一瞬で落ちるものだ」

「詩人みたいなこと言うな」

「だから愛を育(はぐ)んでいこう」

「俺はゲイじゃない」

ここはきっぱり言っておかなければ。

尚志は面と向かってそう言った。

「愛は性別を越える」

「越えちゃいけない境界線もあるんだぞ」

「まさか……尚志は俺が嫌いなのか？」

なぜそこで「まさか」の言葉が出てくるんだろう。日本語の使い方を忘れてしまったのだろうかこの帰国子女は。それとも何か根拠でもあるのか。

尚志は、連の自信満々な態度に、「俺は間違っていないよな？」とだんだん不安になってきた。「好きか嫌いかなんて、まだ分からないだろ」

「では、第一印象は？」

「綺麗な目をしてるなー……って」

つい素直に言った途端、連はポツと頬を染めて目を逸らし「照れる」と呟く。

「頬を染めるなー」

「脈ありとみた」

「……あんたがゲイってことには偏見はないつもりだが、俺はストレートなんだ。恋愛対象が違うことに気づけ」

ストレートなりにストレートに言ってみたが、連は首を左右に振って「恋愛対象になったのは尚志が初めてだ」と告白する。

あーあーあー、そんな重大なことを、片づけも終わってない食卓で言うなー。

連に握られている右手が汗ばんできた。

「ちょっと待て。その……恋愛対象でない付き合いは……あったんだな？」

「まあ、たしなみ程度に」

「たしなむなよ！」

「誘われて、嫌がる理由もなかったし」

「いやいやいやいや、そこは男として断っておけよ！ というか、ポジションはどっちだ！」

最後の問いかけは、好奇心からだったが余計だった。

突っ込む方なのか突っ込まれる方なのか、それは個人の自由なのだから。

尚志は「ごめん」と言ったが、連はご丁寧に「突っ込ませていただいた」と答える。

衝撃だった。

「なんで？ そんな綺麗な顔してんのに」

「顔じゃなく性格だろ。こういうのは。それに、俺に言わせてもらえれば、尚志の方が綺麗だ。愛する欲目もあるのかもしれないが」

「性格で上下が決まるってのか……理解できない」

「大人しい性生活を送ってたんだな」

「派手ならいいってもんじゃない……が、連は……結構いろんな人と付き合ってたのか？」

自分の中にある、この手の好奇心は抹殺したいと、尚志は質問してから思った。

下世話だ。

「それなりに。だが、過去は過去。俺は尚志と幸せな未来を築く」

「……好きになってくれるのは嬉しいが、俺は男に興味がない。期待を持たせることはできないから、ハッキリ言っておく」

これで分かってくれたらろう。

尚志は連の両手に包まれていた右手をそっと引き抜き、後片づけのために立ち上がった。

本文 p32～39 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>